Osaka University Knowledge Archive

Title	京都市方言話者のスタイル切換え
Author(s)	辻, 加代子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2003, 5, p. 2-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23224
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大社会言語学研究ノート』第5号（2003年3月）2-27

京都市方言話者のスタイル切換え

辻　加代子

1.　調査の概要

1.1.　インフォーマント情報

〔表1〕

	年齢	職業	居住歴
SA[*1]	72	無職(元呉服関係専門職)	1-6：京都市東山区（八坂神社の近く）　6-40：下京区（鉾町）　40-71：中京区（鉾町）　71-：右京区
SC	65	自営業	0-：京都市中京区
YA[*2]	21	営業職(織物関係)	0-：京都市中京区
YC	21	学生	0-：京都市中京区
YF	25	学生	0-18：新潟県南蒲原郡　18-23：富山県富山市　23-：大阪府池田市

*1 SAは修業時代から職業生活をずっと室町筋で送った。また、YAとは右京区に引っ越すまで同居していた。
*2 YAとYCは幼稚園からの幼なじみである。

1.2.　談話情報

〔表2〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老—老	SA—SC	親しい同年代	43分	SAが質問、SCが答える
老—若	SA—YA	祖父と孫	32分	同量の発話
老—調	SA—YF	初対面	51分	YFが質問、SAが答える
若—若	YA—YC	親しい同年代	43分	同量の発話
若—調	YA—YF	初対面	44分	YFが質問、YAが答える

2.　結果および考察

2.1.　自称詞

2.1.1.　結果

〔表3　自称詞[*1]〕

以下の表で数字は出現数、×は使用不可の項目を表わす。
また、引用節内で出現した場合はすべて除外した。

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ワタシ[*2]	-	-	22	-	-	-
ボク[*2]	-	-	3	1	7	20
ワシ[*2]	7	1	1	-	-	-
オレ[*2]	-	-	-	43	9	-
ワレワレ	-	-	1	-	-	-
オジーサン[*3]	×	3	×	×	×	×
オジーチャン	×	17	×	×	×	×

*1 「自称詞」の語を一人称代名詞を含めた「話し手が自分自身に言及することばのすべてを包括する概念」(鈴木 1973) として使用する。
*2 接尾語ラが付加されたワタシラ・ボクラ・ワシラ・オレラ含む。これらの形は単数扱いと解釈できる場合もある。(発話例[1]参照)
*3 接尾語ヤラが付加されたオジーサンヤラ 1 例含む。

(1) SA は《対老》でワシのみを使い、孫が相手の《対若》でワシとオジーサン・オジーチャン (以下オジーチャン類と呼ぶ) でオジーチャン類がかなり優勢、《対調》でワタシが圧倒的に多くなっている。ワシラと「ら」という接辞が付加されているにもかかわらず、〔1〕のように話者一人を指示していると解釈される場合がある。【以下で、発話例は基本的に文節ごとの分かち書きとし、「、」は文内の一定の長さ以下の短いポーズ、「。」は末尾の下降調イントネーション、↑は上昇調イントネーション、∧は上昇下降調イントネーション、「〈…。SA : ～〉」のような場合の「〈 〉」は発話の重なりを示す】

〔1〕

→454SA:わしらでも あんたに いっぺん ほれ、小野へ 連れていってもろたやろ。やっぱりー、違うもんなー↑、(SC:まーね↑) 良かったもんなー、あんなん。 〔老－老〕

(2) YA は《対若》《対老》の両場面でボクとオレの形式を使い《対若》では圧倒的にオレを、《対老》ではほぼ半分の割合でそれぞれを使用している。すなわちオレの比率は《対若》＞《対老》となっておりボクとオレが反比例する形で連続的な切換えとなっている。《対調》ではワタシが 1 例ある他はボクを使用している。

2.1.2. 解釈

(a) SA は相手との関係、つまり初対面か親しい関係か、親族関係にあるか否かという二重の対立に応じて初対面の《対調》でワタシ・ボク、相手が親しい関係にある《対老》でワシ、親族関係にあり、かつ目下の孫に対する場合ワシもしくは親族名称オジーチャン類を使うというようにドメインによる切換えを行っている。

(b) SA と YA とも《対調》が一番フォーマルな場面と位置づけられており、初対面・調査する側・大学関係者・標準語使用者という YF の属性がその位置づけの契機になっていると思われる。また、フォーマル場面で SA はワタシ、YA はボクを使用するという使用語彙の違いは話者自身の属性 (年齢や社会経験) によると思われる。

2.2. 対称詞

2.2.1. 結果 (集計結果は次頁表 4 に記した)

(1) SA は《対老》《対若》でアンタとオマエの使用率は逆転し、《対老》でアンタが優勢。《対調》ではオタクとアンタが現れるが使用数自体が少ない。連続的な切換えと言える。

〔表 4　対称詞[*1]〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
オタク	-	-	1	-	-	-
アンタ[*2]	35	9	2	-	-	-
オマエ[*3]	2	16	-	16	-	-
オジーチャン	×	×	×	×	1	×

*1 「対称詞」には対称代名詞はもとより話し相手に言及することばのすべてを含めることとする。
*2 接尾語ラが付加されたアンタラ含む。なお、アンタラは単数扱いとなっている場合がある。
*3 接尾語ラが付加されたオマエラ含む。なお、オマエラは単数扱いとなっている場合がある。

(2)　YA は《対老》でオジーチャン 1 例、《対若》でオマエを使用し《対調》では対称詞の使用は全くみられない。

(3)　なお、SA は対称代名詞に間投助詞的な機能を持たせて使用している場合が多い。なお、ここで間投助詞的な機能とはおおむね「文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働き」（益岡・田窪 1992:53）を指す。そのような発話例が《対老》でアンタを用いて多数認められる（〔2〕参照）。《対調》におけるアンタの 2 例も間投助詞的に使われている（〔3〕参照）。《対若》ではアンタの形式による間投助詞的用法が 8 例中 6 例あった（〔4〕参照）。

〔2〕

→384SA:な　往復やったら　あんた（SC:あー）　二千円　やんか　〔老－老〕

〔3〕

382SA:時に一、行く　十三参り　っちゅーのが、(YF:うん)　あるんですわ。(YF:はい)　あの　渡月橋渡ってね↑、(YF:はい)　ほでー、渡月橋　渡ったとこに　虚空蔵さんかな↑、なんか　そーゆー、お、お地蔵さんの　お寺が　あるんですよ。そこへ　お参りに　行く。それ　京都の、伝統行事でして、(YF:あっ　はい)　十三の歳にね↑。(YF:あー)　で、そーゆーの　みんな　も、そんな　その

→　時分なんか　あんた、今　みたいに　バスも　なけりゃ{笑い}(YF:なければ)　うん　まー　京福電鉄　あったわけ。それで　嵐山　行って　あと　みんな　歩いてね↑、(YF:はい)　ぐるぐるして、今みたいに　{息を吸う}バスが　発達してへんから。　〔老－調〕

〔4〕

→271SA:いや、即死やったら　まだ　あんた　えーけど　あんた　中風に　なって　寝込んだら、にっちもさっちも　いかへんやん。　〔老－若〕

2.2.2.　解釈

(a)　フォーマルな場面として設定した《対調》では対称詞という言語項目自体を使用しないことが選択される傾向にあり、この点は YA において徹底している。

(b)　SA は年齢が高い SC にはアンタを、孫にはオマエを使用し、YA は幼稚園からの幼

馴染である友人にオマエを使用することから待遇レベルはアンタがオマエより高いと言える。

(c) §2.1.2.とあわせて考えると《老—若》の親族同士の場面では祖父は目下の親族である孫の視点に立った親族名称を使用し（鈴木 1973:161,162）によれば親族名称の「第二の虚構的用法」)、孫は目上の親族である祖父に親族名称を使用しており、日本語に一般的な親族成員間の対話の使用規則（鈴木 1973:150-153）に従った運用を行っている。

2.3. 他称詞としての親族名称

2.3.1. 結果

〔表 5 親族名称〕

		老（SA）			若（YA）		
形式	指示対象	対老	対若	対調	対若	対老	対調
オジーチャン	YA の祖父＝SA	×	×	×	1	-	-
オバーチャン	YA の祖母＝SA の妻	-	2	-	1	1	-
オトーサン	YA の父親＝SA の息子	-	1	-	-	-	-
オヤッサン		-	1	-	-	5*1	-
オヤジ		-	2	-	-	8	-
オカーハン	YA の母親	-	-	-	-	2	-
オカン		-	-	-	-	1	-
オトート	YA の弟＝SA の孫	-	-	-	-	-	2
名前		-	-	-	-	3	-
イモート	YA の妹＝SA の孫	-	-	-	1	-	2
名前		-	1	-	-	-	-
ムスコ	SA の息子	-	-	2	×	×	×
チョーナン	SA の長男	-	-	1	×	×	×
チョージョ	SA の長女	-	-	1	×	×	×
マゴ	SA の孫	-	-	4	×	×	×

*1 オヤジサン 1 例含む

(1) SA は《対若》で孫である YA の視点に立った親族名称を使用し、《対調》でムスコ・マゴを使用しており話し相手が身内か否かでカテゴリカルな切換えを行っている。

(2) YA は《対若》《対老》で目上の親族に尊敬接辞オを使用している。《対調》では目上の親族に言及していないので、目上の親族に言及する際の切換えの様相はわからない。目下の親族である弟に言及して身内の SA に言うときは名前を、他人の YF に言うときは親族名称を使いカテゴリカルな切換えを行っている。

2.3.2. 解釈

(a) SA は身内の目上に対する言及はなかったものの話し相手が身内か否かにより異なる

運用を行っており、日本語の規範的な敬語運用に添った切換えをしていると考えられるのに対し、YA は切換えているものの徹底していない。この違いは両者の社会人生活の長さの違いと関わっている可能性がある。YA の《対若》でのオジーチャン・オバーチャンの使用は YC が幼なじみであることからその頃の言い方の延長上にあると思われる。

2.4.　原因・理由表現

2.4.1.　結果

〔表 6　原因・理由を表わす接続助詞〕

上段の数字は出現数、下段の（　）内は（普通体形に後接/丁寧体形に後接）を示す。

なお、以下では丁寧体形の語はデス・マスなど丁寧形式が付加された語形、普通体形の語は丁寧形式の付加されない語形という意味で用いる。

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ンデ	-	-	-	-	-	9 (8/1)
カラ	4 (4/0)	9 (9/0)	18 (15/3)	11 (11/0)	26 (26/0)	23 (8/15)
シ*1	1 (1/0)	-	-	3 (3/0)	-	-
サカイ	7 (7/0)	2 (2/0)	1 (1/0)	-	1 (1/0)	-
サケ（ー）	7 (7/0)	6*2 (6/0)	2 (1/1)	-	-	-

*1 前件と後件が 1 対 1 で対応しており、かつ前件が後件の「原因・理由」の意味・機能を明瞭に表わしている場合、および終助詞カが付加され理由を尋ねる疑問文となっている場合のみ集計した。
*2 ハケ 1 例含む。

〔表 7　原因理由接続詞〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デスカラ	-	-	-	-	-	1
ダカラ	-	2	17	10	20	15
ソヤカラ*1	3	2	11	-	-	-
ホナカラ	1	-	-	-	-	-
ソヤサカイ*2	-	-	2	-	-	-
ソヤケー*3	-	1	1	-	-	-

*1 ホヤカラ：SA《対老》1 例《対調》5 例含む
*2 ヤサカイ含む
*3 ホヤケー含む

(1)　SA、YA とも多様な語形を使用しているがその内容は異なる。SA は接続助詞としてカラ・シ・サカイ・サケーを用いている。カラについて出現数が高い順に挙げると

《対調》＞《対若》＞《対老》となる。サカイは逆に《対老》＞《対若》＞《対調》となる。なお、ンデに関して言うと、SA は〔5〕のように《対調》で使用した例が1例だけあったがこの場合「ん」は「こと」に置きかえられるものであり、表6の原因理由表現ノデの集計には加えなかった。

〔5〕

513SA:はー。わたしら、そのー　おけらまいりで　夜中に　行って、火縄　ゆーて、あのー、こーゆー、縄ね↑、(YF:はいはい)　あのー　火ーつけて　それが　も　ずーっと、火ー　ついたまま　(YF:うん)　燃えていく　縄を　売ってるわけです。中略　ほいで　こー　くるくる　回しもってねー　ほいで　帰って、昔は　かまどでしょ↑、家がね↑、(YF:そーですね)　それで、火ーつけて、お雑煮　炊くの。(YF:あーー　そーですか↑)　おけらまいりも　そーゆー、あのー　いわれ

→　が　あるんですわ。それで、元日の　お雑煮を、ひー　つけると、ゆーんで、夜中に　まー　もーてきた。　〔老ー調〕

(2)　YA は接続助詞としてンデ・カラ・シ・サカイを用い、そのうちカラの使用が多くンデが続く。ンデは《対調》場面でのみ使用され、カラは出現数の多い順から言うと《対老》＞《対調》＞《対若》となっており、シは《対若》でわずかに使用されている。《対調》では、23 例のカラで終わる発話のうち 14 例が中途終了発話となっている。なお、《対若》では 11 例中 4 例、《対老》では 26 例中 16 例が中途終了発話であった。〔6〕は丁寧体と共起し、かつ中途終了発話となっている例である。

〔6〕

319YF:はーー。いや　でも、混んで　ますよ↑、休みの日とかー、(YA:は)　河原町とか　すーごい　人。

→320YA:あれ　たまにね、ここ　京都かなと　思うぐらい　人　いることありますからね↑　〔若ー調〕

ンデは発話例〔7〕の 1 例以外は、直前の述部に丁寧形式が共起していない（〔8〕）。中途終了発話となっていたのは 9 例中 7 例であった（〔9〕参照）。

〔7〕

097YF:で、そこで、知恵を授かるって　えー　(YA:はい)　で　嵐山の　渡月橋を　も、振り返らずに、

098YA:そー。ははい

099YF:なんか、何人かで　連れ、何人かで　連れだって　行くもんなんですか↑一人一人で↑

100YA:も、一人一人で　行って、

101YF:ですよね↑

102YF:はい。

103YF：あー。何人かで　連れだって行って、わざと　後ろから（YA：そー）おーいとか言って｛笑い｝

→104YA:｛笑い｝あー　そー　やりますんでね↑、ぜったい　子どもやから。　〔若ー調〕

〔8〕

→150YA:もー、一応はね∧、受験した子は　いたんですけど、いなくなった[ん]は　一人だけなんで、けっきょく　十五人　そのまま。　〔若－調〕

〔9〕

203YF:どの　時期も　{笑いながら}多いですよねー↑、(YA:はい)　あー、で、行ってみてー　まとまとまっ、(YA:まとめて{笑い})　でも、なん　なんてーか　なん　何階で　かいてあるから、金、金箔貼ってありますからね↑

→204YA:そ　そんな感じですねー、中学ぐらいですから。ま　あんま　真剣に　見てなかったんで。　〔若－調〕

次の〔10〕〔11〕はシが文中で使われ、原因・理由の意味がはっきり出ている例である。

〔10〕

→164SA:あ、前からやしか↑　〔老－老〕

〔11〕

→354YA:今　何が　起こるか　わからへんし　早めに　〈筆者補足:小学生のとき埋めたタイムカプセルを〉　開けたいよなー∧　〔若－若〕

(2)　SA、YA とも《対調》でのみ丁寧形式と共起している。カラ、サカイで共起した率が高い。

(3)　接続詞に関しては SA,YA ともダカラの使用が圧倒的に多い。YA は他に《対調》でデスカラを用いる。SA はサカイ系を用いるが使用数は少ない。また、方言形と標準語形が融合したと思われるソヤカラ等の語形も用いる。なお、SA によるダカラの使用例は YA がダカラを使用した直後に見られた。

2.4.2.　解釈

(a)　従来からある方言形サカイ系（サカイ・ソヤサカイ等）は若い世代でほとんど使用されなくなり、全国共通語形であるカラ系（カラ・ダカラ等）が日常生活で普及してきている。この変化は接続助詞より接続詞で速く進行し、接続助詞の場合、フォーマルな場面で変化が進んでいるようである。また、同じ共通語形でもンデはカラより遅れて若年層によりフォーマルな場面から採用されている。原因理由表現では共通語形が威信形として高いスタイルを担うという形でスタイル切換えに関与していると言える。

(b)　高年層ではサカイとサケ（ー）という音声的な違いもスタイル切換えに関与している可能性があるが発話例が少ないのではっきりしたことは言えない。

(c)　語形の選択プラス丁寧形式の付加という手段により重層的に切換えが行われている。語形による丁寧体形の出現率の違いは、発話の丁寧さの違いと文法的な環境の制約

も関わっており、従属句全体についてさらに調べる必要がある。

(d) YA が《対調》場面でカラ・ンデで終る中途終了発話、《対老》場面でカラで終る中途終了発話を多用しているのは、若い世代にこのような発話がフォーマルな場面や年長者に対する発話としてふさわしいものと認識されている可能性がある。

(e) SA、YA がわずかに使用しているシは、遠藤（1982）で京都市を中心にして「雨が降るのシで中止だ」のように使われ、「サカイに比してより俗語的である」と記述されているシと同じものと考えた。しかし、共通語並立接続助詞シと区別しにくいことも確かである。フォーマル場面で使用が認められず、丁寧形式と共起すると並立助詞のシと変わらなくなることからカジュアルなスタイルで使われる形式と言えよう。

2.5. 逆接接続助詞・接続詞

2.5.1. 結果

〔表 8　逆接接続助詞〕　　下段は（普通体形＋接続助詞/丁寧体形＋接続助詞）とする

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ケレド	1 (1/0)	1 (1/0)	1 (0/1)	-	-	-
ケド	14 (14/0)	11 (11/0)	32 (12/20)	35 (35/0)	31 (31/0)	65 (2/63)

〔表 9　逆接接続詞〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ケド	-	-	1		-	1
ソヤケド*1	9	10	6	1	1	-
ダケド	1*2	-	-	1	-	-
デモ	1	-	-	32	9	5

*1 セヤケド・ホヤケドを含む。
*2 ホダケド

(1) 接続助詞に関して見ると、使用語形は SA、YA ともケド（ケレド）を主に使用し、特に《対調》場面での使用が顕著に多い。YA の場合《対調》で使用するケドのうち中途終了発話をつくっている例、丁寧体と共起している例はそれぞれ 44 例、63 例であった。いずれの語形も共通語形と同形である。YA の中途終了発話として現れたケドの例を挙げる。この〔12〕の意味は「対比的逆接」「推論的逆接」といった逆接らしい意味（渡部 1996）はほとんど認められないように思われる。

〔12〕

309YF:前略あ　そーだ、京都の　人から　見て　大阪　ってのは　どんなとこなんですか↑

→310YA:もー　賑やかー、ですけどね、一言で。(YF:はっ↑)　人も、町も。　〔京都市:若ー調〕

(2)　接続詞に関して言えば、SA はソヤケド、YA はデモの使用が圧倒的である。YA は逆接接続詞自体の使用が他場面と比べ《対調》場面で特に低く、ケド・ダケドともにどの場面でもほとんど使用していない。唯一ケドを用いた発話例を下に挙げる。

〔13〕

333YF:＊＊＊は　たくさん　いますよね↑

→334YA:けどー、{息を吸う}まー　住んでる場所の　せいか、すごい　気軽なんですよ。(YF:あー)うん。　そーゆー　行楽地　行くにしても、自転車で、行けるし{笑いながら}、ちょっと　頑張らんんと　だめですけど　まー。(YF:{笑い})　〔若ー調〕

2.5.2.　解釈

(a)　逆接接続助詞に関してはSA、YA ともに語形のバリエーションはほとんどなくドメインにより語形を使い分けている様子は見えないが、使用頻度と使用環境が異なる。すなわち、語形の違いによらず、丁寧形式を付加（SA,YA）したり、中途終了発話を使用(YA)したりするという手段によるドメイン間切換えを行っていると考えられる。（§2.4.、§2.6.参照）

(b)　逆接接続詞が《対調》場面で、逆接接続助詞と比べ使用数自体が顕著に少ないのは、ターンの変わり目で発話の冒頭で現れた場合、話し相手の発話に反駁する形で使われる形式となるので、相手への配慮を要する場面では使用されにくいと考えられる。他方、逆接接続助詞で終わる発話は〔12〕であげたような表現や、前置き表現などに使える用法があり、フォーマル場面でも使用の余地があると思われる。逆接接続助詞の諸用法についてはさらに検討する余地があろう。

2.6.　丁寧体

2.6.1.　結果

〔表 10　デス*1〕　　表内の数字の上段は出現総数、下段は従属句末出現数/文末出現数とする

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デス*2	-	1 (0/1)	195 (18/177)	2 (0/2)	-	247 (124/123)
ダ*3・φ*3	245 (41/204)	216 (25/191)	155 (30/125)	290 (52/238)	184 (33/151)	60 (19/41)

*1 デス、ダ・φとも引用節内の語は集計の際すべて除外した。

*2 非過去形・過去形・推量形を含む。方言形デッセ・デッシャロ含む。

*3 形容詞・形容詞型活用をする助動詞・ジャナイカおよび述部にたつ単独の名詞・名詞句で、丁寧体形をとり得るが丁寧形式が付加されていない語（句）（本稿では「普通体形」と呼ぶ）の出現数を集計した。なお、φとしたのは述部にたつ単独の名詞・名詞句で指定辞等が付加されていないものである。
ただし、以下の 1)～5）に該当する場合、集計から除外した。1）～3）は丁寧体形と普通体形の対立が生じない環境にあるとみなしたものである。4)のソー系の一部、5)は丁寧体形と普通体形の対立はあるが、異なる文法項目として別途集計した。標準語ノダ相当の方言形ンヤ・標準語ノデハナイカ相当

のヤンの前の環境にある形容詞等は集計した。
1)名詞・形式名詞が後続する場合
2)方言形指定辞ヤ・標準語ノダ相当のンヤ等の述語・推量形ヤロ等
3)接続助詞「ナラ」が後続する場合、南（1974、1993）A類従属句内（主に連用形状態副詞的用法）
4)あいづち（反復系・ソー系等）、聞き返し
5)間投助詞の前の名詞（句）

〔表 11　マス*1〕　　表内の数字の上段は出現総数、下段は節末出現数/文末出現数とする

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
シマス*2	-	-	58	-	-	33
		-	(14/44)			(15/18)
スル*3	170	113	150	303	195	71
	(88/82)	(58/55)	(134/16)	(135/168)	(111/84)	(56/15)

*1 シマス、スルとも引用節内の語は集計の際すべて除外した。
*2 非過去形・過去形・方言形確認要求マスヤロを含む。
*3 動詞・動詞型活用をする助動詞（否定形を含む）・形容詞ナイ・チャウ・ン・ヘンについて丁寧体形をとり得るが丁寧形式が付加されていない語（本稿では「普通体形」と呼ぶ）の出現数を集計した。
ただし、丁寧体形と普通体形の対立が生じない以下の環境にある以下の場合集計から除外した。標準語ノダ相当の方言形ンヤ・標準語ノデハナイカ相当のヤンの前の環境にある動詞等は集計した。
1)推量形
2)形式名詞が後続する場合
3)あいづち、聞き返し
4)融合形「ッチュー」（＝という）等の融合形自体
5)南(1974;1993)A類従属句内にくる場合

なお、当該方言ではデス・マスとも出現環境が標準語の場合と多少異なる。また、世代によっても異なる可能性がある。例えばヤンは「行きますやん」のようにデス・マスに後続することができる。標準語ノダ相当の～ンヤは「行きますんや｛ね/わ｝」のようにデス・マスに後接し、終助詞ネ・ワに前接することができる。チャウはデス・マスに後続できず元の形の「違う」から予想できるように丁寧な形はチャイマスである。
否定形式に関しては、表 10 で「ダ・φ」、表 11 で「スル」として示した「普通体形」の出現数の集計にあたっては、京都市方言（本稿）・東京下町（松丸・辻 2002）において老年層で動詞否定形・形容詞ナイにマセンをとる発話例があったこと、現代日本語で一般に規範とされている運用（窪田（1992:55-57）他より）等を考えあわせて集計基準をたてた。

（1）否定形が入った場合の丁寧体形がデス形をとるかマス形をとるかに関しては世代差、個人差が見受けられた。表 10、表 11 には示せなかったが、例えば動詞否定形の場合、老年層の SA は～マセンを若干使用しているが、若年層の YA はマセン自体の使用が認められなかった。

以下に存在を表わすアルの否定形〔14〕、形容詞ナイ〔15〕〔16〕、否定形過去〔17〕〔18〕、動詞に後接する否定辞ナイ〔19〕〔20〕〔21〕、ジャナイカ〔22〕、カモシレナイ〔23〕、方言形当為表現ンナラン〔24〕の丁寧体形の発話例を示す。

【ナイデス・ヘンデスの場合は一重下線、マセンの場合は波線を付す】

〔14〕

→368SA:そんなもん　あらしません。ふーん。　　〔老－調〕

〔15〕

161SA:京都の一、中心街は　だいたい　そーゆー、えー　まーまー、極端に　ゆーたら、職業　職業

→　　で一、分れてるよーな、まー、全部が　全部じゃ　ないですよ。(YF:そーですか)　そーゆー、なにが、結構　あったんです。　〔老－調〕

〔16〕

→422SA:京都の　{笑いながら}これは、京都独特　新潟には　ないですか↑　〔老－調〕

〔17〕

→322SA:も、鉾町。あ、鉾は　なかったですけど、(YF:はい)祇園祭の　区域です。(YF:あ、はーはーはーはー)　祭りの　区域ちゅーのは。京都は、祭りの区域　区域が　あるわけです。〔老－調〕

〔18〕

→070YA:ま、全く　なかったですねー　6年間なしで。　〔若－調〕

〔19〕

→022SA:それがー、わかりませんけどねー∧。(YF:えー)　えー。　〔老－調〕

〔20〕

→208YA:のですよね↑、うん。あんまり　覚えてへんですけど。　〔若－調〕

〔21〕

→304YA:{笑い}全然　わからへんでした　〔若－調〕

〔22〕

→198YA:前略　で　清水寺とか　あんまり　習わない、じゃないですか↑　〔若－調〕

〔23〕

→190YA:行かないです。あのね↑、地元、やからこそ、かもしれない、ですけど。　〔若－調〕

〔24〕

486SA:前略　いま　みな、郊外に　出てはるからね↑、(YF:はいはい)　山科の方とかね↑。(YF:え
→　　ーえー)　いっぱい　行かんならんですわ。　〔老－調〕

(1)　集計結果を見ると SA も YA も《対調》場面でのみデス・マスを用いていることがわかる。

(2)　表の（　）内に示した文内における各形式の出現位置を比較すると YA の《対調》場面で丁寧体形でも文末以外（表では括弧内の左項）での使用頻度が高いことがうかがわれる。SA の場合《対調》場面のスル形式でその傾向が顕著である。

2.6.2.　解釈

(a)　SA、YA によるデス・マスなどの丁寧形式の使用は《対調》に限られている。高いスタイルの談話でもその談話を構成するすべての文が丁寧体形であるとは限らず、丁寧体を基調としている談話でも聞き手を意識しない箇所では普通体を用いることはありうるとされる（野田 1998 他)。このことを考慮すると、《対調》における「丁寧体形と普通体形の混用」と《対老》《対若》における「普通体形の専用」という丁寧体形の使用の如何を軸とした場面による切換えが行われていると言える。

なお、発話に際して、話者は文末や従属句末で常に普通体形と丁寧体形のどちらかを選択をしなければならない。このような言語項目を本稿では、選択必須項目と呼ぶことにする。

(b) YA は《対調》場面で丁寧形式の使用と並行して、言い切りを避けるというストラテジーを用いているように見えることから、文を言い切らないこともスタイル切換えに関わる言語行動に加えることができるかもしれない。この点に関してはさらに検討する必要があろう。(§2.4.2.、§2.5.2.参照)

2.7. 推量形式

2.7.1. 結果

〔表 12 確認要求用法〕

	老 (SA)			若 (YA)		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デショ (一) ↑*1	-	-	24	1	2	1
マスヤロ↑*2	-	-	5	-	-	-
ヤロ (一) ↑*3	23	25	1	21	2	-

*1 動詞述語と形容詞述語、名詞述語推量形のうち確認要求用法の合計で〔表 10〕でデスの欄に示した数の一部である。
*2 動詞述語推量形の確認要求用法で、〔表 11〕マスの欄の集計数の一部である。マッシャロ↑も含む。発話例を〔25〕に示す。
*3 動詞述語と形容詞述語、名詞述語推量形のうち確認要求用法の合計で〔表 10〕でダの欄に示した数の一部である。

〔表 13 推量用法〕

	老 (SA)			若 (YA)		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デショ (一) *1	-	-	-	-	-	2
デッシャロ*1	-	-	1	-	-	-
ヤロ (一) *2	5	7	-	32	2	1

*1 動詞述語と形容詞述語、名詞述語の推量形推量用法の合計で〔表 10〕でデスの欄に示した数の一部である。
*2 標準語形ダロ (一) は出現しなかった。動詞述語と形容詞述語、名詞述語の推量形推量用法の合計で〔表 10〕でダの欄に示した数の一部である。

〔25〕

482SA:だから もー 全部 専門職がね↑、(YF:ですねーハ) うん。十日町は ほれ、一つのー、会

→社に あの、友禅 やったっても 全部 集めてありまっしゃろ↑

483YF:集めてありますね↑

→484SA:一貫作業で やってますやろ↑

485YF:そーです そーです。 〔老ー調〕

(1) この項目は SA と YA とで切換えのパターンが異なる。SA は《対調》で標準語の推量形の丁寧な形式であるデショを確認要求用法で多用し、《対老》《対若》ではヤロ

を使用している。形式によりほぼカテゴリカルに切換えている。推量用法は方言形ヤロの一形式のみを用い《対調》では使用自体ほとんどみられない。

(2) YA は《対調》《対老》で表にあげた推量形式自体をほとんど使用していない。使用する形式はヤロ中心で、デショは少数例しか認められない。両用法とも《対若》では多数使用している。

2.7.2. 解釈

(a) SA が場面に応じて形式を切換えているのに対し、YA は確認要求用法自体を祖父 SA や調査者 YF を相手に使用していない。YA にとっては SA も YF も年長者であることが使用を控える要因となっているのだろうか。逆に SA は 3 人の話し相手より年長であり、経験豊かである。YF に対しても丁寧な言葉遣いはしているが、若年の YF に説明したり紹介したりする立場で会話を進めている。そのような言語外的条件や話題もこの結果に関与していると思われる。

(b) SA は《対調》場面で確認要求用法と推量用法で使用する言語形式を変えており、今回のデータだけでははっきりしたことは言えないが、確認要求用法でデショを主に（マスヤロをまじえて）用い、推量用法でヤロを用いるというように形式による機能分担を行っている可能性がある。

2.8. 素材待遇語（動詞・助動詞）

2.8.1. 結果

〔表 14　素材待遇語*1〕表内の数字は上段に出現総数、下段に話し相手待遇/第三者待遇とする

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調*2	対若	対老	対調
語彙的尊敬語	-	-	**3** 0/3	-	-	-
美化語	-	-	**5** 5/0	-	-	-
オ～ヤス(方言形)*3	-	-	**1** 1/0	-	-	-
ラレル	-	-	**9** 1/8	-	-	-
ハル(方言形)	**1** 0/1	**20** 0/20	**19** 2/17	-	**2** 0/2	-
φ*4	**73** 58/15	**35** 26/9	**35** 0/35	**61** 12/49	**57** 1/56	**24** 0/24
ヨル・オル・トル(方言形)*5	**11** 0/11	**13** 0/13	**1** 0/1	**15** 3/12	**3** 0/3	-

*1 主文末、南（1974）の分類による A 類以外の従属句内の動詞述語で、対応する主語が一人称のものを除く。左列 φ より上の行には上位待遇とされる表現形式を挙げた。
*2 話し手を主語として謙譲語が 3 例現れた。

*3 森山（1994）に、高年齢層の用法では丁寧融合型尊敬形式として位置づけられ、そのままの形で「オ入リヤス」のように命令表現としても使用できるとされている形式である。
*4 素材待遇語が付加されない形式。
*5 近畿中央部方言で軽卑的意味をもつとされる形式である。オル・トルの発話例には待遇的にはニュートラルだと感じられるものもあったが形式を優先して集計した。

(1) SA はハル以外の尊敬語形式を《対調》でだけ使用し、話し相手待遇での使用はこの場面のみとなっている。

(2) YA は《対老》でハルを 2 例使用している以外、どの場面でも尊敬語を使用していない。

(3) ヨル・オル・トルの《対調》場面での使用は YA は全く無く、SA は 1 例のみである。使用される場合第三者待遇での使用に傾いている。

2.8.2. 解釈

(a) 尊敬語に関して、SA は不徹底ではあるが場面による使用形式の切換えを行っている。

(b) 軽卑語については両者とも場面による切換えを行っている。その契機は相手との親密度によると考えられる。初対面の調査者には使いにくい語類なのであろう。

(c) SA の尊敬語の使用実態をより詳しく見ると、同一ドメイン内での切換えが認められる。

《対調》場面で出現した尊敬接辞ラレルとハルを時間軸上におけ、主述の対応とともに示すと〔図 1〕のようになる。SA は最初、共通語形ラレルを使っていたが、発話番号 135 以降方言形ハルに切換えている。ハルに切換えた箇所の発話例〔26〕（発話番号 135）と、ラレルを用いた例〔27〕（発話番号 57）を示す。

〔図 1〕　　凡例　○：ラレル　★：ハル

時間軸 ⟶

発話番号	46	57	77	79	107	125	135	139	197
使用形式	○ ……	○ ……	○ ……	○ ……	○ ……	○ ……	★ ……	★ ……	★ ……
言及対象	友禅職人	友禅職人	YF（話し相手）	問屋	友禅職人	室町界隈に住んでいた友禅職人	堀川で友禅流しをしていた人	近所に住んでいた職人	西陣の織屋

発話番号	207	215	221	229	378	404	428	486	521	573
使用形式	★ ……	★ ……	★ ……	★ ……	★ ……	★ ……	★ ……	★ ……	★/○ ……	★
言及対象	室町の商店主	鉾町の呉服屋	室町の呉服屋	呉服屋の主人・妻	YF（話し相手）	子どもを十三参りに連れて行く親	京都の親	友禅職人	京都の初詣客	桓武天皇

〔26〕

135SA:え、もー　上　上を　ふたしてあんのや。(YF:はいはいはい)　その、堀川　っちゅー　川は、(YF:はい)　疎水から　水引ーて、(YF:あっ　はい)　ほいで、ここーで、こーゆー、友禅の　あ

→　の一、ほれ　いろいろな　不純物が　付くでしょ↑、こー　今の、糸め　置いたり、（YF:そーですねー∧）ねー∧。そーゆーのを　だーっと　洗てはったん。（YF:はーー）ほやから　みな　固まってた。　〔老－調〕

〔27〕

→　057SA:前略　ほいでー、こーゆー、絵を　描く人がね↑、（YF:はい）いらっしゃるわけですよね↑、最初。で、絵を　描かれる　僕が　注文した、絵を　描かれるわけです。（YF:はい）ほな　次　この　白い　ほれ、線が　あるでしょ↑（YF:えっ　はい）これを　糸めいと　申しましてね↑、（YF:はい）この一、この色を　差せるよーに、その　絵の上を、縁取りするわけですね↑　〔老－調〕

〔26〕を含め図1で言及対象となっているのは、話し相手を除くと、具体的な人物ではないカテゴライズされた人物か歴史上の人物である。現代標準語ではこのような対象に尊敬接辞を付加することはないが、京都市方言では付加するのが普通である。SA は最初共通語形ラレルを用いていたが言いにくく、語感もあわないため切換えが起こったと考えられる。

2.9.　間投助詞

2.9.1.　結果

〔表 15　間投助詞[*1]〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デスネ	-	-	-	-	-	1
ネ（－）	2	1-	111[*2]	1	5	74[*3]
ナ（－）	13	33	1	44	12	-
サ（－）	3	-	-	2	-	-

*1 次の形式に後続するものを間投助詞と認定した。（松丸・辻 2002 による）
接続助詞・接続詞・副詞・副助詞（は・も）・格助詞・テ形・名詞（「ダ」「ヤ」を補うと意味が変わるもの）

*2 丁寧形式が付加されたデスケドネ 4 例、デスカラネ 1 例、マスケドネ 4 例、マシテネ 1 例、マセンケドネ 1 例含む。

*3 丁寧形式が付加されたデスケドネ（－）9 例、マスケドネ 1 例、デスカラネ 3 例、マスカラネ 2 例、マシタカラネ 1 例、デスシネ 1 例、マスンデネ 1 例、マシテネ 1 例含む。

(1)　SA、YA とも《対調》場面では圧倒的にネ（－）の使用が多い。は丁寧形式と共起することもある。YA は丁寧体形に接続助詞を伴う形でネを多用している。《対調》では他の場面と比べ間投助詞自体の使用も多い。

(2)　ネ（－）に近い機能を持つと思われる方言形ナ（－）は SA、YA とも《対若》で《対老》より多く使用されている。

(3)　ネ（－）、ナ（－）については SA、YA とも《対調》場面とそれ以外の場面でほぼカテゴリカルに切換えている。

2.9.2. 解釈

(a) ネ（ー）とナ（ー）の場面による出現数や丁寧形式との共起関係の比較からは前者が上位形式だと考えられる。

(b) フォーマルな場面の方が間投助詞の使用自体が多いのは話し相手の反応をうかがいながら話を進めていこうとする話し手の態度の表れと言えよう。

2.10. あいづち

2.10.1. 結果

〔表 16 あいづち[*1]〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ソーデスネ	-	-	-	-	-	2
ハイ系[*2]	-	-	27[*13]	-	2	58
ハー系[*3]	15	5	6	2	1	29
エー系[*4]	-	-	14[*14]	2	-	1
ソー系[*5]	-	3	8	6	8	11[*17]
アー系[*6]	21	15[*11]	7[*15]	3	9[*16]	20[*18]
ホー系[*7]	2	-	-	1	-	-
フン系[*8]	17	26	-	-	1	2
ウン系[*9]	110	39	4	49	20	39
ヘー系	7	2	1	-	-	-
ナー系	2	3[*12]	-	-	-	-
繰り返し	2	1	3	2	2	7[*19]
その他[*10]	-	-	3	-	-	-
会話の先取り等[*20]	-	-	2	1	5	-

*1 ナガノ-マドセン,ヤスコ他（1999）による「相手に対する応答の中で、質問や命令に答えたものや実質的な内容を含む発話ではなく、『聞いている』、『わかった』、『それからどうなった、もっと聞きたい』などの意思を表明することによって、対話を円滑に進める機能を持つ言語形式」という定義に加え、ターンの交替につながらないものとする。

*2 ハイ・ハーハイ・ハハイ・ハイハイ

*3 ハー・ハーー・ハーハーハー

*4 エー・エッ・エーエー・エーエーエー

*5 ソー・ソーヤ・ソヤソヤ・ソラーソーヤ

*6 ア・アー・アーアー・アーアーアー

*7 ホー・ホーー

*8 フン・フーン・フーーン・フンフン・フンフンフーン。ただし摩擦音の完全な聞き取りは困難である。

*9 ウ・ウン・ウーン・ウンウン

*10 その他の主なものはイエイエ・イヤイヤ・イヤーなど

*11 アー　ソーカ 5 例、アーアーソーカ 2 例、アー　ソーナン 1 例含む

*12 ナン 1 例含む

*13 ハイ、ソーデス 1 例含む

*14 エーエー　ソーソーソー1 例含む

*15 アー、ソーデスカ 2 例含む

*16 ア、ソーナンヤ 1 例、アッソー1 例含む

*17 ソー、コノジキニデスネ 1 例含む

*18 アッ、ソーデショーネ 1 例、アー　ソーデスネ 1 例含む

*19 オージデス 1 例含む

*20 「あいづち」と「実質的な内容を含む発話」との境界にあり明確にどちらに属するとも言い切れない発話で、言い換えや先取りや補充により発話を完成させるタイプのあいづちでザトラウスキー(2000)

で「共同発話」すなわち「2人以上の参加者によって作り上げられる名詞句や節、単文、複文」に近い。具体的には発話例〔27〕〔28〕のようなものである。

〔27〕

285SA:おじーちゃんは　今なー∧、血圧の　うーん、下る　薬と、血の　流れを、よーする、血流、を

→　よーする、薬［飲んでる］。でー、だから　今　怪我　したらな↑、あかんのやて。血が　止まらへん。(YA:流れる)　だから　手術　できへんのや。おじーちゃんは　今。うーん。〔老―若〕

〔28〕

319SA:いやいや、おじーちゃん　も　決めてんの。(YA:あ、決めてんのやんか)　もー　月　火ーと。ほんで、水　木　金　どー　日　と、初めはな↑、月　水とか　月　木とか、(YA:うん)　こー、とばし

→　ててん。ほんだら、医者がな↑、一日　やめて　飲むよりも　二日　連続して、(YA:やめたほーが)　やめた方が　効果ある[て]。　〔老―若〕

(1)　SAはハイ系とエー系を《対調》のみで使用し、他は連続的な切換えが見られる。YAは《対調》でハイ系＞ウン系＞ハー系の順に多く使用している。両者ともその他の場面ではウン系を多く使用している。

(2)　方言形であるへー系・ナー系はSAだけが使用する。YAは標準語形を連続的に切換えている。

(3)　SAはカジュアルなドメインで頻繁にあいづちをうち、YAは逆にフォーマルなドメインでより頻繁にあいづちをうつ傾向があり、SA　は身内同士となる《対老》場面ではあまりあいづちをうっていない。

2.10.2.　解釈

(a)　あいづちに関してはあいづちの形式自体、および、丁寧体形と普通体形の対立が重層的に切換えに関与している。

(b)　SA　の場合、フォーマルなドメインでハイ系を、カジュアルなドメインでフン系・ウン系を用いて切換えるという形ができていると思われる。

(c)　YA　はあいづちに関しては方言的な要素が認められない。フォーマルなドメインでハイ系を選択し、丁寧形式を付加するという傾向はあるが、ウンの使用を特に控えるという意識は薄い。

(d)　あいづちの頻度は、世代間のあいづちに対する評価の世代間の違いを反映している可能性もあるが、談話の展開など、さまざまな要素との関係をさらに検討する必要があろう。

2.11.　音便形

2.11.1.　結果（集計結果は次頁表17に記した）

(1)　SA　は《対調》で方言形である動詞のウ音便形・イ形容詞のウ音便形・副詞のヨーのみを使用し、場面による切換えをしていない。

〔表 17　音便形〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
動詞促音便形*1	2(8.3)	-	-	30(48.4)	13(50)	13(92.9)
動詞ウ音便形	22(91.7)	20(100)	44(100)	32(51.6)	13(50)	1(7.1)
イ形容詞非音便形*2	-	-	-	3(60)	-	-
上記イ形容詞ウ音便形	9(100)	3(100)	1(100)	2(40)	1(100)	-
副詞：ヨク	-	-	-	-	1(100)	1(50)
副詞：ヨー	1(100)	4(100)	-	6(100)	-	1(50)

*1 下に示した「は行」動詞の連用形でテ・タ・タリが後続する場合標準語と同じく促音便で出現したもの。会う・洗う・言う・思う・買う・吸う・違う・使う・払う・貰う・～てしまう
*2 次にあげるイ形容詞連用形でナルなどの動詞に続くもののうち音便形をとらないもの。
多い・遅い・早い・安い・良い・悪い

(2)　YA は《対若》でもほぼ半数は共通語形を使用しており、《対調》では方言形はほとんど現れない。

2.11.2. 解釈

(a)　SA に場面による切換えが見られないのは以下のような理由が考えられる。①動詞の促音便形・イ形容詞音便形は本人に方言形だという意識がなく、切換え対象となっていない。②YF がずっと年下だということから最高度の注意をはらう必要がないと考えた。③活用は変換が複雑で文法の根幹にかかわる部分であり、標準語の音便形に転換するのは高い文法能力を要するが、そのレベルまで標準語の習得が進んでいない。④この項目は方言形でもフォーマル度ないし待遇度により切換える必要がないと考えた。

いずれの理由にしても方言形か標準語の二者択一が義務的な言語項目であるにもかかわらず切換えが行われなかった項目と言える。

(b)　YA はすでに標準語の音便形への移行段階にあり、フォーマルな場面で標準語形が選択される。

3. まとめ

(a)　今回取り上げた言語項目に関して言えば、SA と YA はおおむね当初企画した場面設定に添った言語行動、すなわち《対調》場面で高いスタイルを選択するというドメイン間スタイル切換えを行っていると思われる。ただし、《対調》場面でも、項目によっては話し相手である YF のもつ複数の属性、例えば初対面・年下ないし年上・標準語で話す等の多様な要因が切換えに微妙に反映していることも見逃せない。

(b)　他方、先行研究でも京都市方言話者の母方言に対する評価は他方言話者と比較して

も抜きん出て高いことが指摘されているが（井上 1994、渋谷 1995 他）、そのような自己評価に裏付けられた自信がフォーマルなドメインでも方言要素がともすれば出現する結果となっていると思われる。ただし、この傾向は SA に顕著で、若年層の YA は今回取り上げた項目に関してはフォーマル場面でほぼ共通語形を使用しており、若年層における共通語の浸透・標準語使用能力の習得がうかがわれる。

(c)　話者の言語切換え時のヴァリエーション選択に到るプロセスを模式的に示し、本稿で取り上げた言語項目に関しあてはめてみると表 18 のようになると思われる。実際の切換えにあたっては、標準語のヴァリエーションと方言のヴァリエーションが交叉し、文法的な制約もかかわりつつ複雑な様相を呈する。

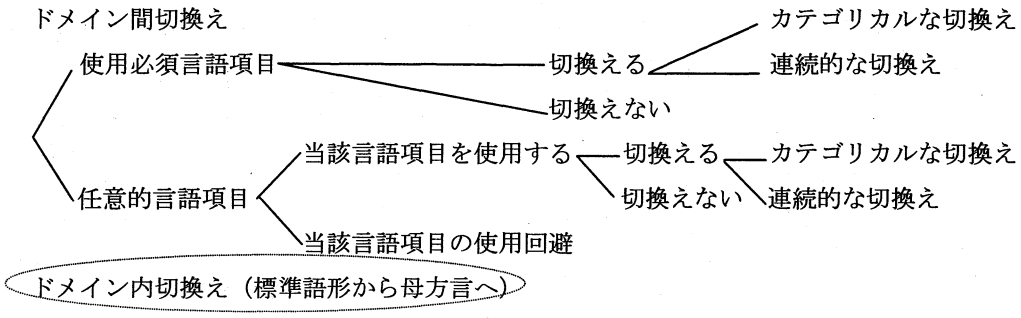
〔表 18　京都市方言における切換えの類型〕

発話に際しての言語項目使用の任意性	切換えの行使 行う/行わない	切換えの方式	具体的な言語項目*1
使用必須言語項目	行う	カテゴリカル	丁寧形式§2.6
		連続的	音便形 YA§2.11
	行わない		音便形 SA§2.11
言語項目の使用自体が任意的	行う	カテゴリカル	自称詞 SA§2.1・親族名称§2.3・素材待遇語§2.8・あいづち§2.10
		連続的	自称詞 YA§2.1・対称詞 SA§2.2・逆接接続助詞 SA§2.5・逆接接続助詞 YA§2.5*2
	行わない		原因理由接続詞 YA§2.4※*2
	当該の言語項目の使用自体を回避する		対称詞 YA§2.2・逆接接続詞§2.5・確認要求表現§2.7

*1 項目名の後に当該項目に言及した節を記した。言語項目のうち特定の話者だけに該当するものは話者記号を付した。
*2 文パターンも切換えに利用する。

(d)　(c) を一般化し、図式化して示すと図２のようになろう。§2.6.2.で丁寧形式の使用・不使用の選択に関して述べたように、ものごとを述べる際、話者が使わないで済ますことのできない言語項目（使用必須言語項目と呼ぶ）と使わずに済ますことのできる言語項目があり、後者に関しては、使用か使用回避か選択することからすでに切換え行動は始まっていると見ることができよう。

〔図２　切換え類型の模式図〕



本稿では示すことができなかったが、ローカルなドメイン内切換えも行われ得ると予想される。

4. 展望

本稿では14の言語項目を分析対象としてスタイル切換えの諸相を検討した。その結果、個々の言語項目間で切換えの様相が異なることを指摘できた。しかし、カジュアルなスタイルとフォーマルなスタイルを対比する場合、一般にイメージされるのはコードとしてのカジュアルコード対フォーマルコードなのではないかと思う。カジュアルなコードとフォーマルなコードをとらえるには各言語項目間の関係を見ることも必要であると考える。
取り上げた言語項目に関しては、文法項目を主とし談話マーカーとなるものも若干加えたが、他に談話の展開の仕方などより大きい単位で比較検討することによって新たな知見を加えることができるかもしれない。

方言と標準語の対立がスタイル切換えとどのように関わっているかについては検討の余地を残している。スタイル切換えに際して標準語形が選択されることが多いが標準語形は必ずしも方言形ときれいに対応しているわけではない。語形選択は意味・機能との対応もあわせて見る必要がある。

前章で指摘したように今回はドメイン内切換えのうちローカルな切換えの事例を示しえなかったが今後そのような切換えの検証を行う必要もあろう。

【参考文献】

井上史雄（1994）『方言学の新地平』明治書院

遠藤那基（1982）『講座方言学7 近畿地方の方言』87-112 国書刊行会

窪田富男（1992）『日本語教育指導参考書18　敬語教育の基本問題（下）』国立国語研究所

渋谷勝己（1995）「心情とわきまえ意識の衝突するところ」『変容する日本の方言』言語 95-11 別冊

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書

ナガノ-マドセン，ヤスコ・杉藤美代子 1999「東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用」『日本語科学　5』国立国語研究所

野田尚史（1998）「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」『国語学』194、左 1-14

益岡隆志・田窪行則　（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版

松丸真大・辻加代子（2002）「東京下町方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート第4号特集スタイル切換え〈1〉』33-49

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

――――（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

森山卓郎（1994）「京都市方言の丁寧融合型尊敬正式」『阪大日本語研究』6、93-110

渡部学（1995）「ケド類とノニ―逆接の接続詞―」『日本語類義語表現の文法（下）』くろしお出版 557-564

つじ　かよこ（大阪大学大学院生）
ttsuji@athena.ocn.ne.jp

〔老—老〕

収録日時：2002年4月3日
収録場所：SA自宅
話題：祇園祭用ワラジ製造業者視察→松山でのサッカー交流試合→ゴルフの話→パープルサンガ→室町の不況の話→銀座のクラブ

001SA：もー　四月にはいったら、あんたんとこの　あの一、町内　なんか、祇園の一　も一　段取りしてんの↑、祭りの。
002SC：うん、まー　理事会一は一、当然あるし一、あー　まー　も一祭りは　も一　かかってるわね↑、で一
003SA：も一　かかってんのか↑
004SC：半分　かかってます。
005SA：段取りで↑。
006SC：はい。
007SA：ふ一一ん。
008SC：も一、{咳} そやから一、あの一、ま一　最前もゆってたよ一に、ね↑、草履一　は、あの一、(SA：う)　草鞋を　こしらえてもらうのに、
009SA：あれ　草鞋で、いま　お一た　ゆ一たやろ↑
010SC：うん。
011SA：あれわ一、あんたとこの　町内、だけ　京都の、(SC：うーん、いや)　祇園祭のとこは　みなそこ↑
012SC：いや　いや、そ一でもないねん。うん　全国には　出しとるけども、
013SA：ほ一たら　なんやんか一、あんたんとこらの辺だけやったら、数　少ないやんか。
014SC：も一　いや　も、全国に、出してる一、そ一ゆ一、あの一
015SA：いや　発注するのがさ一、(SC：あ一　で一)　島根県で　発注するにしてもさ↑、
016SC：うん　も　よそにわ　ゆ一てない。よそ　ゆ一たら　また一、あらへんよ一になったら　かなんさけ一。{笑い}
017SA：そやけど　あんたんとこらでで　なんぼ　よ一いったって、百　いらへんのやろ↑
018SC：百て　いらへん。25一だけ。25足。
019SA：わ一ざわざ一、そ、それだけ↑　ほんな　相手も、もっと一、欲し一やろに。
020SC：いや一、そ一　ゆ一ても一、ねっ↑、自分とこ一　も　去年一　やっぱし　断られる一、ちゅ一なこともあったしね↑
021SA：ほな　あんたんとこ一　なんかは、そこ一　長いこと、取引してんの↑
022SC：うん　ま一、僕はやけど　ま　十年ぐらいは　なるね↑
023SA：ほ一、それは　やっぱり　どっかから　聞いて↑
024SC：うん　ま一　新聞でね一∧　ちょっと見て、その一、前の年にね↑、あの、往生したんや。前の年にね↑(SA：うん)　う一ん、と　ゆ一ことは　行事一、ちゅ一て　ま一、役が　きて、(SA：うん)　まわって、きて一　うん　いままでやったら一、北がわの　釣り小屋で、(SA：うん)　う一ん　あの一、草鞋　あの　草鞋が　はいった一、ちゅ一てね↑あの　鮎釣りに、鮎がけに、(SA：うんうん)　草鞋　使いおるから。で　そのときに一、あの一、草鞋がはいった　ゆ一たら、さ、見にいくわけや。で一、それで　色が　ついてない、ね↑、(SA：うん)　うん　ま一、神事に使うのやから　ま一　そ一ゆ一なもんは、ま一ま一、(SA：う一ん) たく　あの一、何回も　いかんならん。(SA：う一ん)　むこ一にも　三十足ぐらいきてやね↑、使えるもんがね↑　三足とか四足とか、しか　あらへん。
025SA：送ってきよって↑
026SC：送ってきて。あ一　はいった　ゆ一ても。
027SA：へ一一。
028SC：なんか　あの一、三回も　四回も　行かんならん、そのつど。ま一、北川も一、ま一、その点は、ね一∧、あ一、ま一　理解してくれて一、電話してきてくれるのやけど。
029SA：ほな一、なにか一↑、あれ　草鞋　注文一、島根県まで　注文、するんやけど　その一、村自体は、よそからも　注文　聞一とるわけやな一
030SC：うん。きーとる　きーとる。全国
031SA：あっちこちの　(SC：うん)　祭りやとか、(SC：うん)　行事の一
032SC：うん。全国
033SA：なにが　あるやん。
034SC：全国ベースで　やっとる。
035SA：は一一。
036SC：うん。
037SA：それ　専門に↑

〔老—若〕

収録日時：2002年3月3日
収録場所：SA自宅
話題：YAの仕事→YAのいきつけの飲み屋→自分と家族の健康→YAの会社→各地の食べ物比較

325SA：おまえとこは　なにか↑土曜日は　も一、全土曜　休み↑
326YA：えーと　例外　あるんやけど、土曜は　基本的に　〈普通　休み。
327SA：ふつ一、まー〉、あの一　基本的には、
328YA：あの一　オフシーズンは　も　ほぼ、完璧、土曜　休み。
329SA：オンて、いつと一、なにが、オフ　ちゅーのは　おまえところの　商売では　いつが　ほならオフになる↑
330YA：えーと
331SA：夏か↑
332YA：夏。(SA：はー)　夏場。
333SA：夏場が　オフか。
334YA：夏場　も一　だって　ほとんど　営業　出ることも　ないし、(SA：あー　そーなん。)　出来たら　ひだり＊＊
335SA：冬は　忙しいの↑
336YA：冬はな　新しーもの　つくらんと　あかんから　(SA：はーー)　冬は　種まき、とか。(SA：{笑い})夏が　(SA：ふーーん)　ちょっと休憩して。田んぼ　休憩さして　新し一、もの考えたりして。
337SA：も一　梅雨じぶんから↑
338YA：うん。あんねー∧
339SA：も一　おまえらで一、も　考えるの。
340YA：うん、考えてるよ↑、どんな　もんが　えーかとか、来年　どんなんが　売れるかとか。
341SA：いや、それは、織り方をか↑
342YA：いや　織り方じゃない、織り方じゃない。がら。柄とか　色。
343SA：柄て　どーゆー　柄のこと↑　おまえらが。織物やろな。
344YA：うん　金襴の　柄。
345SA：あー、あれ　柄一、あ　そーか　そーか。
346YA：衣装の　柄。
347SA：衣装の　柄が　あんの。
348YA：うん、だから　あの一、織り場は一　そーゆー技術的なこと　わかっても、(SA：うん)　やっぱ　現場からは　遠いやん。(SA：そらーそーや)　うん。やっぱ　現場　いつも　見てきて一、こー　着物の　こーゆー形に　でるのには　今年　こーゆーの　はやったなー　とか、そーゆーの　ゆーて、じゃー　来年は、
349SA：なんか　そーゆー、参考になる、(YA：そー)　古代　衣装とか　そーゆーもの＊＊。
350YA：そー　あれも　本　見ながら、(SA：うん)　じゃ　今年　この柄　アレンジしてくれ　とか　織り場へ　持って行って、＊＊＊って＊＊
351SA：図案　描かへんの↑
352YA：図案はね一、あ　図案や　ゆーたら、
353SA：いるんやろ↑
354YA：うん　いる。
355SA：んで　図案も　こーてんのやろ↑　よそから持ってきおるやろ。(YA：あー、もー)　それは　かわへんの↑
356YA：買わへん。(SA：ふーん)　織り場に　任してある　そーゆーの。(SA：ふーん)　下図を。
357SA：そやけど、そーゆー　ずあーん、やさんが　あるやろ。
358YA：あるある。
359SA：な　そこへ　発注するんやろ↑
360YA：織り場は　発注するやつ　なかったと思う。
361SA：あっ、直接　おまえんとこからは　図案屋に　描かさへんの↑
362YA：うん。
363SA：へー。あ　そーなん。ふーん。
364 YA：だって　その　織りに　なったときの　形がだって　あんまり　湧か、イメージが　湧きづらいから、＊＊く　(SA：あーあー　そーか。)　営業では。(SA：ふーん)　おじゅずは　紋図は　わかりづらい　から一。あと一、刺繍　作る時は　自分で　絵一描かくけど。(SA：ふーん。)　あの　刺繍もの一とか　加工ものとか。(SA：あーあーあー。)　刺繍　やってくれ　(SA：うん)　とか、お客さんが、オリジナルで、ちょっと　手刺繍で　ものを　考えてくれんか　言われて。たぶん　おれが　最初に　自分で　絵を　ばーって　下絵　描いて、(SA：ふーん)　で　こんなの　こんな　図一で　三つぐらい　(SA：{笑い})　描いて、自分で。(SA：あ　そーなん)　あの一　本から　引っ張りぱり出してきて、(SA：うん)　あ　こーゆーの　えーなと　思ったら　こー　真似し

〔老—調〕

収録日時：2002年3月3日
収録場所：SAの自宅
話題：着物生産工程→京都の繁華街→鉾町・室町→十三参り

207SA：あのねー、昔はねー、室町　ゆーて　まー、町屋でしょー↑。（YF：はい）　ほやから　住んではったわけですわ。（YF：あー）　従業員は外から　通ってきても、（YF：はい）　そこの一、家の、お方は、（YF：はい）　家族　全部そこ　住んでて、（YF：へー）　子供は　その周辺の　学校　行って、（YF：はい）　と、ゆーかたちでした。（YF：はい）　でー、い、いまー　だから　あの、鉾のね↑、鉾町　っちゅーんですよ↑

208YF：えっ↑

209SA：ほこ　む、鉾のね↑、（YF：はい）　鉾　知ってはりまんなー∧、祇園祭の。

210YF：あーー、はいはいはいはい。あの　祇園祭りで、並ぶ　あの　〈鉾↑

211SA：並ぶ〉　鉾。

212YF：はい。

213SA：あれが、あるとこー、鉾町　っちゅーんですわ。

214YF：あっ　鉾町って　ゆーんですか↑

215SA：へー。鉾の　町ね↑、（YF：はいはい）　鉾町。それわ　皆ね↑、町屋が　みな、呉服屋さんが一　寄ってーつく、やってはったわけです。

216YF：あっ、その　鉾ー↑

217SA：鉾町を。（YF：はい）　もー　維持してはっわけです。（YF：はいはい）　それが　今ー、みな　ビルになって　マンション　なったりして、（YF：えー）　ほいで　そこのー、すんではった人も　みな　まー、郊外へ　行ったりね↑、（YF：はい）　してますやろ↑（YF：あーー）　ほやから　学校が　なくなってきてますわね、いちばんに。

218YF：あっ　その　小学校が　ですね↑

219SA：小学校が、（YF：はい）　統廃合してー、よーけい　もーわたしらが、いた　学校、は、ほら孫ー、も、行ってた　学校でも　すでに、なくなってるんです。

220YF：あっ　そーなんですか↑

221SA：はい。（YF：はーー）あの　中心の　学校は　も、どんどん　なくなってる。（YF：ふんふん）　中学校は　統廃合するし、小学校、も、統廃合して、（YF：統廃合）　三つも　四つもで、ひとつ　生徒数が　いーひん。とゆーことは、その一　今まーで　室町っちゅーて　呉服屋さんが、そこに　住んではったかたが、住んでないわけ。（YF：あーあーあーあー）　ほいで、会社に　なりますわね↑。（YF：そーですね↑）　そいで、まー、マンションでのーても、自社ビルにしたら、も、そこに、あのー、社長さんやらは　住まんと、（YF：はい）　よそい、郊外へ　行って、（YF：はい）　ねー∧、そこは　もー　会社の、（YF：の、もー）　いま　そ、ばーっ、空家ですやん。

222YF：空家ーって　ゆーか、ま、働く　場所ー↑

223SA：場所だけで　に　なってしもた。

224YF：だけなってしまった。

225SA：だから、昼人口と　夜人口は　ごろって変わってきてる。

226YF：ごろっと　変わるわけですね↑

227SA：はい。

228YF：夜人口は　も　ほとんどいない↑

229SA：居ないと。そーゆー具合な、あの一形式に　なってきてますね↑（YF：はー）　で、わたしらの　若いじぶんわ、皆　もー、それこそ　晩にでも、まいど　おーきに　っちゅーて　はいってったら、（YF：はい）　ご主人も、も　奥さんも　いやはったわけですわ。（YF：はい）　ほんなもん、今は　もー、あんたー、錠かけて、帰ってしまはりますやん。（YF：はいはい）　シャッター　下おりてますやん。（YF：おりてはい）　ねー∧。（YF：はーー）　烏丸通りみたよなもんですわ、今　室町通りも。

230YF：あっと　つまり　えーと　烏丸通りも　確かえーとー、

231SA：今　も　ビルだけで、〈会社だけでしょ↑

232YF：も　そーゆ　会社、だけ〉　ですよね↑

233SA：えー。

234YF：あっそこ　やっぱ　そこもー↑、

235SA：呉服屋　よーけー　ありますやん。（YF：はい）　ま、　証券会社や　銀行もあるけどー、呉服屋も　よーけー　あるんです。（YF：はーい）　それも、昔は　みな　町屋やった。

236YF：町屋ーさんでー、（SA：うん）　人が　住んでた　わけですよね↑

237SA：住んでたわけです。　でも　今は　もー　会社

〔若―若〕

収録日時：2002年3月10日
収録場所：YAの自宅
話題：就職面接時の敬語→餡子や御菓子→修学旅行→スノボ→関西弁の話→祇園祭

706YA：有給　全部　消化しとるやん、祇園祭　休めへんやんけ　おまえ。そんなしたら。
707YC：祇園祭なー　(YA：うん)　人　多いしなー↑
708YA：今や　昇格して　太鼓やのに。ある意味　もー、リーダーやで。
709YC：ま　リズムたいやもんな↑。
710YA：うん。リズム音痴の　俺が、よーも　太鼓　やってるな　思ったら、(YC：{笑い})　べつにできるもんやな↑、あれ　簡単やし。
711YC：ちゅーか　みんなが　合わすんやろ↑、太鼓に。
712YA：うん　合わす。
713YC：やろー↑
714YA：だから、いっぺんな、最初　初めて　[のとき]、めっちゃ　緊張してな↑、　めちゃ　速かってんや。　(YC：ふん)　も　こんなペースで。ほな　踊りーが　踊りの先生が　おるやん↑、(YC：うん)川島先生。あの　座わると、釜石くん　速いでーてとか。あんた　踊り　やってたら　あんな　速く　まわったら　しんどなったわて、言われて。あほ＊＊ですよ、とかいって。
715YC：めっちゃ　遅して　やんねん。とーん、とーん
716YA：あー、そーそー　それぐらいで　やっとったらな↑、踊り手は　めっちゃ　たいへんや。見ていて　楽しいわ。(YC：くろ＊ーいねー＊)　それ　かせち。これ　そーやって　＊＊
717YC：そーーーれっとか　ゆって。{笑い}そーーれーーや。
718YA：あの　それ、俺　一回　あの　そーれが　めっちゃ　うずみあがったことが　あってな　一回。そー、れーっ　とかいって　声　高くー　{笑い}
719YC：恥ずかしー。はずかし
720YA：声が　いきなり　上がりだしてな↑。{笑いながら}わー　しまった　かっこ　わりーとか　思って。
721YC：恥じさらしちゃった。
722YA：練習やし　えーやん　思ったけど。えら　緊張すると　やっぱ　声　裏返るねんか↑
723YC：裏返んなー∧
724YA：うん。で、日野さん　おれ　太鼓ー　ずっと　太鼓　やってた＊＊　おれらん時から。(YC：うん)　あの人は　声　えー　声　してるからな↑
725YC：そー♪　れー♪　{低い声音で}{笑い}
726YA：もー　響くからなー。あれくらい　なりたいねんけどなー。どーも　声　こもるもるからな↑、俺。
727YC：んなん　難しそー。でも　祇園祭なー　どーするんやろなー　今年。
728YA：あの　梶くんやったら　女連れなー。
729YC：{笑い}おったらなー。(YA：{笑い})　どっちにしよーかな。{笑い}(YA：{笑い})いちごーにごー　さんごー。何日間　やるんやったっけー。
730YA：えーと、〈十四　、十五、十六　十七。
731YC：宵山　宵宵山〉　十七は、
732YA：十四は
733YC：十七は、
734YA：鉾　建設して〉、ま、十五　十六　十七やな↑。
735YC：十七は、まー　ないから、十五、十六、十七。午前　六人やな↑午前午後　午前午後　午前午後。
736YA：なんで↑、十七は　巡行やで↑
737YC：巡行、は
738YA：あ、そーか、十四　まだ　夜店ー　出てへんか↑　十五　十六か　本番
739YC：四人かー。誰　削ったらえーんやろ↑
740YA：そんなんが　おらへんのに　なに　言ってるの↑
741YC：{笑い}
742YA：{笑い}一人　おったって　えーらいことやのに。
743YC：なんてことを。言ー過ぎでしょ　あなた。
744YA：おるやろ↑、でも。
745YC：気まずいことした。
746YA：おまえ↑
747YC：ぽとぽとぽとと。{笑い}ちょっと　もー、スエード　しみになるんは　いやなんや。

〔若—調〕

収録日時：2002年3月3日
収録場所：SAの自宅
話題：YAの仕事→地域の学校事情→京都の観光→修学旅行→京都の通り名→祇園祭

485YF：だから　さっきも　どこに住んでますか　って　聞ーて、地名を　聞かれたときにー、(YA：うん)　えー　なんでしたっけー、
486YA：釜座　御池ーで、
487YF：釜座　御池でー　あー　あの辺か　あの辺かって、
488YA：てゆーふーに　なるんですけど、{笑いながら}だいたい。
489YF：道も　そしたら　わかる↑
490YA：わかるんです。
491YF：はーーー。便利は　(YA：ほんまに　便利ですよ)便利ですよねー∧。ほーんとにー、便利だなー{笑い}うんうんうん。あ　そーだ。京都って言えば　いろいろー　ちょっとー　なんだろー、えーと、あ　そーだ　あと　祇園祭の(YA：あ　はい)　氏子ー、を　してー、るー、とかなんとかで。なんか、笛　吹いたり　とかしたって。
492YA：あっ、僕ー　氏子じゃ　なくて、(YF：なんか)僕はねー　踊り、手ーとー、囃し方を　やったんですけど↑、(YF：はいはいはい)　それも鉾によって　いろいろ　形態が　ありましてね↑、
493YF：あー　あの、ほ　ほ　あの　ほ　ーつーつー、鉾じゃなくて　あのー　なんだっけ　あの
494YA：ほこ　山車でしょ↑
495YF：だしー↑
496YA：もー　そーそー。
497YF：山車、ですよね↑
498YA：はい。で、(YF：で)　まー　そーゆー、の　から　、ま　ちっちゃい　山、ってゆー　かたちのもの　あるんですけど、(YF：えー。)　そーゆーのが　ありまして、で　僕　行ってんのは傘鉾　って　ゆー、は　やつなんですが↑(YF：はい)　そこはねー　あのー　し　綾傘鉾と　四条傘鉾と　ゆー　二基　あるんですよ、傘鉾はね↑　(YF：はい)　で、そこが、ちょっとね↑　踊りーが　つくんですよ。踊り手が。
499YF：踊り手が　つくんですか↑
500YA：はい。で、あのー、こど　えー　四条傘鉾は　あのー　子供が、踊るーやつでー、で　まー　綾傘鉾は　能、みたいなかんじの、(YF：うんうんうん)　能楽やってる人が　やるんですけど↑(YF：はいはい)　んーで　まー　その　子供んときから、(YF：うん)そーゆーの　やって、で　いまー　その方、その　大きくなったら、囃し方ー、(YF：あー)　移っていくと　ゆーかたち　なんですよ。
501YF：へー　じゃ、(YA：うん)　ってことは　もー子供のときは　踊って↑
502YA：踊り子を　やってー。
503YF：踊り子を　した)。(YA：はー)　あ　そーか　さっき　ちょー[ど]　写真　見して　(YA：はー)もらいましたけどー　踊ってたのは　あれ(YA：あー　はい)　踊ってたの　ってーかあ　その、着て　〈るのは、
504YA：るー　〉服を、衣装　着て、袴　着て、あの
505YF：あー。(YA：はい)。で、今は　囃し方を↑
506YA：囃し方。
507YF：で↑なにを　担当↑
508YA：僕　今　太鼓ーです。
509YF：あっ　太鼓ですか↑
510YA：はい。
511YF：えー　太鼓　って　どんな　太鼓でした　か↑
512YA：あのー　小さい、こーゆー　小さい　和太鼓の、(YA：はい)　こー　なんですか、能楽の、{息を吸う}使うよーな　小太鼓に　近いんですけど。
513YF：うんうん。あー　それを　だからー　その、
514YA：こー　かかき＊。
515YF：たたくわけですね↑
516YA：はい。
517YF：えーと　えーと　あと　な、どんなー　楽器が↑
518YA：あのねー∧、笛　鐘ー　太鼓なんです。(YF：はー↑)三種類だけで、
519YF：はい　はい。あ、笛　鐘　太鼓、あーあー、そーか　そーか　そーか。
520YA：で、あの↑
521YF：笛は　あのー、〈こんちきちん　ですよね↑。
522　YA：こんこんきん〉。で　やっぱりー、みんな　いっしょの　今度はー　鐘ーなんですよね↑。すごい　祇園祭の音　ゆうーと　鐘の音が。